

## 第五章 光る源氏の物語 春秋優劣論と六条院造営の計画

[第一段 齋宮女御、二条院に里下がり]

齋宮の女御は、\*思ししもしるき御後見にて(故宮が御想像なされた通りの淑やかな帳台での床搦きで)、やむごとなき御おぼえなり(帝はこの上なく気に入って御出ででした)。\*注に<齋宮女御は帝の後見役を果たし、御寵愛も厚い。齋宮女御は二十三歳、帝十四歳で、九歳年長。>とある。でも、この文はそんなに分かり易くは無い。「おぼしもしるき」は故宮の<お考えになった事がはっきりと顕れた→ご期待なさっていた通りの>だが、それは「濡標」巻の終りに記された、六条御息所の息女を入内させるという光君の意向に対する入道の宮の思いとして、「いとあつしくのみおはしませば(御自身は御加減が御悪いので)、参りなどしたまひても(参内されても)、心やすくさぶらひたまふこともかたきを(寛いで長居申し上げる事も出来ないことから)、すこしおとなびて(齋宮のように御所様より少し年長で)、添ひさぶらはむ御後見は(御側に付き侍る御世話役は)、かならずあるべきことなりけり(かならずいなければならない、と御思いなのでした)」との文を受けている。これは3年前のことだが、当時すでに権中納言の御女が祖父の太政大臣の家格で弘徽殿の女御として入内していたが、冷泉帝十一歳、弘徽殿女御十二歳、という似合いながら年少者同士の子供っぽさを、入道宮は懸念していたらしい。その懸念の払拭を宮は潜在にでも自分と光君に準えて、年上の齋宮の<落ち着いた御世話>である「御後見」に「思し」た、ということだろう。そして、その翌年とは2年前の春に入道中宮の推挙という形をとって、内大臣養女の家格で齋宮女御は入内した。その齋宮女御の「御後見」を帝は「やむごとな」く「御おぼえ」たというのだから、「御後見」が<床仕種>なのは明白だが、それを承知の上で<内々の御世話焼き>という言い方を味わえば分かり易い。なぜなら実際の帝の個人的な衣食住や身だしなみの御世話は各女官がいるし、その総指揮を執る上臈もいるので、その舞台回しの上での役回りとして主に帳台での帝の相手役こそが妃なのだろう。

御用意(女御は妃としての御自覚が)、\*ありさまなども、思ふさまに(振る舞いなどにも表れていて)あらまほしう見えたまへれば(申し分なくお見受けできたので)、\*かたじけなきものにもてかしづききこえたまへり(内大臣も養父としての面目が立って、尊い御方として平伏して御仕え申していらいっしやいました)。\*「ありさまなども思ふさまに」は齋宮女御についての記述だが敬語がない。そして、何故かその事に注釈もない。この箇所は「御用意」の補足だから、敬語を省いたのである。なぜ補足が必要だったのかと言えば、前の文との違いを言割る為である。前の文は、語り手だからこそその当事者代弁で見た事のように話したものの、閨での秘め事への言及であり、何を如何ように言ったところで実は傍目に分かる事柄ではなく、信憑性に乏しかったが、この文は客観的な評価として、傍目にも齋宮女御が妃として相応しかった、という説得力のある記事だからである。\*「きこえたまへり」という謙譲行為に敬語がつく表現は、女御を敬うべき貴人が主語である。注にも<源氏が齋宮女御を。>とある。確かにこの部分も分かり易くは無いが、この文の分かり難さは「ありさまなども思ふさまに」が「御用意」の補足たる構文にある。

\*秋のころ(秋の中頃に)、二条院にまかでたまへり(齋宮女御は二条院に里下がりなさいました)。寝殿の御しつらひ(光君は正殿の屏風や小道具などの飾り付けを)、いとど輝くばかりしたまひて(女御の部屋に相応しくいっそう豪華に用意なさって)、\*今はむげの親さまにもてなして(今は臣下として帝妃を迎える親らしい形をとって)、扱ひきこえたまふ(お迎え申しなさいます)。\*「秋のころ」は<秋の中頃>とする。では、秋は7月8月9月なので中の8月かということ、8月中旬なら中秋の名月に掛けた場面を描くはずなので、むしろ8月末か9月初めくらいかと思う。特に根拠はないが、次に時雨らしい場

面が直後にあるのと、秋口や晩秋との明示が無い「ころ」の語感からの推定で、何となく見当を付ける。\*「今はむげの親さま」は分かり難い。話の流れからすると「今は」は<入道宮が亡くなった今となつては>のようにも見える。「むげ」は<むやみに、ひたすら>かもしれない。「親さま(親らしいこと)」といつても、光君は多様な親の立場を持っていて、色々な解釈が出来そうな言い回しだ。で、色々考えるのは面倒なので、直前の<女御が帝の妃として納まってきた>という文を「今は」と単純に受けて、「むげ」を<下へも置かぬ→臣下として>、「親さま」を<親らしい体裁>と解した。

秋の雨いと静かに降りて、御前の前裁の色々乱れたる露のしげさに(前庭の植え込みの色とりどりに咲く花に雨粒が降り注いで)、いにしへのことどもかき続け思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり(光君は居室の東の対から正殿の女御の部屋へお寄りなさいました)。

こまやかなる鈍色の御直衣姿にて(深い灰色の喪服姿で)、世の中の騒がしきなどことつけたまひて(引き続いた公人の不幸への弔意を表向きにはお示しになりながら)、\*やがて御精進なれば(その実は不実の罪ゆえの厄除け安泰祈願の御自戒なので)、数珠ひき隠して(数珠を袖に隠して)、さまよくもてなしたまへる(慎ましげに上品に為さっている)、尽きせずなまめかしき御ありさまにて(この上ない雅な御様子で)、御簾の内に入りたまひぬ(御簾の内の母屋にお入りになりました)。\*「やがて御精進なれば」は<そうする事が修行になるので>という言い方のようだが、意味が分かり難い。「やがて」は<結局は>のような語感だが、「ことつけたまひて(表向きにはそうして)」をうけているので、此处では<その実は>となる。「御精進(みしやうじん)」は<仏道修行に専心すること>と大辞泉にあるが、この修行の中身が分からない。まあ、おおよその見当は付くが、何の為の修行なのかは整理しないと分かり難い。基本的には光君は不実の罪、それも母子姦淫の罪を犯して、その悪行に起因する災いを覚悟しなければならない。その災いの一つの現われとして、父帝亡き後に光君は失脚した。しかし、また別の、そして恐らくは、より大きな天命によって、光君は天変の荒業によって生き返り復権し、実子にして表向きは弟宮の即位が果たされ、その後見役として内大臣に登りつめた。しかし、災いは全て祓われたのではなく、今また政情不安と異常気象が現れ、要人も次々に他界した。そして遂に、藤壺宮亡き後に今上帝が出生の秘密を知るに及んで、光君の罪深さが改めて思い知らされている昨今である。で、要するに<修行>は<安泰祈願の自戒>である。

## [第二段 源氏、女御と往時を語る]

御几帳ばかりを隔てて(女御は御几帳一つを隔てただけで)、みづから聞こえたまふ(光君と直接お話しになります)。

「前裁どもこそ残りなく\*紐解きはべりにけれ(庭の草花は全て憂いも無く思い思いに咲いています)。\*「紐解きはべり」という表現については、注に<「百草の花の紐解く秋の野に思ひたはれむ人などがめそ」(古今集秋上、二四六、読人しらず)を踏まえる。>とある。この引歌は酒の席での余興なのか、色女を大勢用意した無礼講なら楽しそうだ。ともあれこの歌を下敷きにしているなら、「残りなく」は<全ての花が>ということだけではなく、「思ひたはれむ(好きなように咲き遊ぶ)」ことにも<思い残すことなく→何の憂いもない>という意味で「紐解く(咲く)」に掛かっている。

いとものすさまじき年なるを(大変に忌まわしい年だというのに)、\*心やりて時知り顔なるも(早合点で時を得たと咲き誇っているのも)、あはれにこそ(健気なものです) \*「こころ遣る」は自動詞で<へまをする、ぬかる>とある。自分勝手な判断で先走る、早合点する、ということだろうか。

とて(と仰って光君が)、柱に寄りゐたまへる夕ばえ(柱の側に座っていらっしゃる夕映えは)、いとめでたし(とても美しい)。昔の御ことども(昔の御息所の思い出話に)、\*かの野の宮に立ちわづらひし曙などを(伊勢下向前の潔斎場である嵯峨野野の宮にお別れを告げに訪れたときに御息所がなかなか御会い頂けずに夜明け近くまで長く外で立ったまま待たされたことなどを)、聞こえ出でたまふ(光君は女御にお話し申しなさいます)。いとものあはれと思したり(光君はだいぶ感慨深そうでした)。 \*光君が野々宮に御息所を尋ねたのは、9年前の齋宮の9月16日の伊勢下向直前の9月7日のことだった。やはり、この日の設定は9月初旬で間違いならしい。なお当日のあらましが、だいぶ長く待たされてから、光君はようやく北の対の縁側に腰掛けて室内の御息所と、たぶん人伝に歌の贈答や語らいをやっと果たしたが、結局は室内には上がれずに、そのまま夜が明けた、ようだ。

宮も(女御も古歌にあるように)、「\*かくれば(昔を思えば)」とにや(とても言う事だろうか)、すこし泣きたまふけはひ(少しお泣きになる気配が)、いとらうたげにて(とても労しく)、うち身じろきたまふほども(少し身をずらし為さる仕方)、あさましくやはらかになまめきておはすべかめる(意外なほど柔らかく優美でいらっしゃるように思われます。すると光君はたちまち齋宮女御に、)。「見たてまつらぬこそ、口惜しけれ(御顔をまだ拝見致していないとは残念でならない)」と、\*胸のうちつぶるぞ(興味で胸を震わすというのは)、うたてあるや(困ったものです)。\*「かくれば」については、注に<『集成』は「いにしへの昔のことをいとどしくかくれば袖ぞ露けかりける」(河海抄所引、出典未詳)。『完訳』は「わが思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづそほつらむ」(拾遺集恋二、七六一、読人しらず)を指摘。>とある。「去にし方の昔の事をいとどしく懸くれば袖ぞ露けかりける」は<過ぎた昔の日々を次々と思い出せば懐かしさの涙で袖が濡れる>とは読めるが、これは複意だろう。これが表意では趣が無いので、歌として成立しない。表意は多分、「古の昔の琴をいとどしく掻くれば袖ぞ露けかりける」で<昔の琴の名曲を熱心に弾けば袖はほつれるがその調べには非常に情感を掻き立てられて感涙に咽ぶ>という管弦の情緒なのだろう。そして続き文に「過ぎにし方」とあることから、この引歌が参照歌だろう。また、「わが思ふ人は草葉の露なれや掛くれば袖の先づ濡つらむ」の方は<愛しい人は草葉の露になってしまったのか、草に触れ掛けた袖が濡れてしまうように愛しい人を思い懸ければつい涙で袖が濡れます>ということらしく、「かくれば」の「掛く」と「懸く」を掛けた技巧的に良く出来た歌、のようだ。 \*「胸潰る」は個体保持や種の継承の強い関心事に接した際の命がけの情報処理で、生理的かつ物理的に<胸が動悸する>。ということは、光君が再び齋宮女御を性の対象として意識した、という描写なので「御精進なれば数珠引き隠して」いる光君としては、如何にも「打立て」あるべき支障ある反応振りに違いない。確かに物語りに成る面白いヤツで、実話としても説得力のある文だ。

「過ぎにし方(過ぎた昔には)、ことに思ひ悩むべきこともなくてはべりぬべかりし\*世の中にも(特に難しい政務に携わる事無く暮らしていた世の中でも)、なほ心から(やはり若さから)、好き好きしきことにつけて(恋愛問題では)、もの思ひの絶えずもはべりけるかな(悩みの絶える事は無かったものです)。 \*「世の中」という語には、<世情、治世>という男性律の意味と<男女の仲、運命>という女性律の意味があって、この文の言い回しはその双意を踏まえて洒落ている。だから「世の中」の語はそのままで言い換えたが、内大臣ならではこの言い回しの妙を何処まで面白く感じるかは、言い換えの問題というよりは読者各自の感性に拠る、ような気がする。

さるまじきことどもの、心苦しきが、あまはべりし中に(そうした恋愛上の気掛かりが数多くある中で)、つひに心も解けず(最後まで心が晴れる解決が付かず)、むすぼほれて止みぬること(こじれたままで終わってしまった事が)、二つなむはべる(二つ御座います)。

一つは(その一つは)、この過ぎたまひにし御ことよ(此方の亡くなられた母君の御事です)。あさましうのみ思ひつめて止みたまひにしが(余りにも一途に思いつめて恨みを残してお亡くなりになったのが)、長き世の愁はしき節と思ひたまへられしを(私の生涯の嘆きの種と存じられました)、

かうまでも仕うまつり(このように御息女を帝妃としてお仕え致し)、御覧ぜらるるをなむ(親しく御会い頂けまするのを)、慰めに思うたまへなせど(縁有る慰めとは存じますものの)、\*燃えし煙の(御息所が焼き場の煙となって)、むすぼほれたまひけむは(後世に託しなされた御縁は)、\*なほいぶせうこそ思ひたまへらるれ(今でもこういう事で良かったのかと案じられる所です) \*「もえしけぶり」の言い回しについては、注に藤原定家は「むすぼほれ燃えし煙もいかがせむ君だにこめよ長き契りを」(奥入所引、出典未詳)を指摘する。>とある。「むすぼほる」は<結ばれる>だから、疑念が凝り固まれば恨みにもなるが、縁が結ばれば目出度い。ところで、結ばれた縁も煙になっては手応えが無くなるわけだが、せめて何らかの形で縁が続くように思いを込めようとするのは、残された者がもう一方の残された縁者に良縁と思いたい何かを感じていればこそではある。 \*「なほいぶせう」は先齋宮を養女として参内させても<まだ訝せしように>思っていると言う事だから、自分の女にする事を諦め切れない光君の下心を覗かせた言い回しなのだろう。

とて、今一つはのたまひ\*さしつ(と言って、光君はもう一つの懸案についてはお話にならずじまいでした)。 \*「さす」は<中止する>。「つ」は動作の意識的完了を示す助動詞。

「中ごろ(少し前に)、身のなきに沈みはべりしほど(官位を失って落胆していた頃に)、方々に思ひたまへしことは(あれこれと考えておりました事は)、片端づつ(かたはしづつ、少しづつ)かなひにたり(実現しています)。\*東の院にもものする人の(東の院に一角を占めている人は)、\*そこはかたなくて(頼れる後見が無くて)、心苦しうおぼえわたりはべりしも(暮らし向きをずっと気に掛けておりましたが)、\*おだしう思ひなりにてはべり(今は穏やかに安心して暮らしています)。\*心ばへの憎からぬなど(上品な生活態度が細かく行き届いていて)、我も人も\*見たまへあきらめて(私もその人も良く分かり合えまして)、いとこそ\*さはやかなれ(とても晴れやかな暮らしぶりです)。 \*「東の院に」と些か唐突に花散里の話を引き合いに出すのは、この少なからず光君の実勢を誇示する文脈の中で女御を花散里に準えて、如何に自分が良家の子女を大切にもてなし、相手も満足して穏やかに暮らしているかを説明しては、自慢げに同様のもてなしの用意があると女御の口説きを意図している。 \*「其処は彼と」は<其は是とはっきりと>で、此处では<つぶさに生活の面倒を見る>。 \*「おだし」は<穏やか>。 \*「こころばへのにくからぬ」は<配慮>が<心憎い>で、花散里は新春の描写で品良く身奇麗にして整理整頓を怠らない生活態度が光君に好感されていた。 \*「見明らかむ」は<はっきり見極める>だが、此处では<相手の価値観を良く理解する>。また、「たまふ」は聞き手への丁寧語で、女御を説得しようとする光君の意図の現われを表現した言い回しなのだろう。 \*「さはやか」は<気分が晴れやか>。

かく立ち返り(このように復職いたし)、朝廷の御後見仕うまつるよろこびなどは(御政道を補佐申し上げる喜びなどは)、さしも心に深く染まず(然して深く感じ入る事はありませんが)、か

やうなる好きがましき方は(こうした色事めいた向きには)、静めがたうのみはべるを(抑え難く心が浮き立ってしまう私のことを)、\*おぼろけに思ひ忍びたる御後見とは(漫然と、御息所を偲んで親代わりに此方の御世話をする者なのだろうと)、思し知らせたまふらむや(お考えなのでは有りませんか、でも私は子供相手の心算はありません)。\*あはれとだにのたまはせずは(東の院の人のような女心で私を好きと一言でも仰って頂かなければ)、いかにかひなくはべらむ(御世話の甲斐が有りません)」 \*「おぼろけに」は<並大抵の～ではない>と説明される分かり難い語だ。此処の文も、一見すると<並大抵の自重ではない御世話>に見えて、それを文脈から<簡単には自重できない気持ちでの御世話>という意味に取ってしまいそうだが、多分違う。「おぼろけに」は今までの例からして<大雑把に、何となく>という語感なので、「思し知らせたまふ」に掛かって<漠然と～とお考えになっている>となるのだろう。つまり構文としては、「おぼろけに～とは～らむや」で反語表現となっていて<～ではありませんか、でも違います>で結ばれる。ということは、「思ひ忍ぶ」は<女御への思いを隠す=光君が自重する>ではなく、<御息所を思って偲ぶ>と取った方が「おんうしろみ」への掛かりが良い。 \*この「あはれ」は文脈上、花散里についての「我も人も見たまへあきらめて、いとこそさはやかなれ」を受ける、に違いない。

とのたまへば(と光君が仰ると)、\*むつかしうて(場が重く澱んで)、御応へもなければ(女御の御答えも無いので)、 \*「むつかしうて」は女御の気持ちなのだろうか。気持ちなら「むつかしう思して」ではないのか。それに「御応へ」の無い理由を、例えば<不機嫌になって>とか<面倒に思って>と勝手に付度しては、危うい意識になりかねない。穏当に見て女御は藤壺宮亡き後、養父の光君の許に親の温もりを求めて宿下がりした筈だ。其処へ光君が不意に内心を吐露したのでは、女御は先ず面食らったに違いない。尤も二十三歳の女御を、実の娘でもないのだから、三十二歳の光君が大人扱いするのは、ある意味で妥当ではあるが、養女であり、帝妃であり、表向きでも弟の嫁であり、内実でなら実の子の嫁である斎宮女御であってみれば、やはり筋違いで女御本人ばかりか読者も呆気に取られる。確かに、場違いで不意に欲情するという事は有り得るが、普通は場違いの認識の方を優先させるからだ。だから、この「むつかしうて」は場面描写に違いない。「むつかし」は<状況が込み入る>とか<事態が打開できない>で、此処でなら不意の光君の発言に<場が澱んだ>のだろう。

「\*さりや。あな心憂(あ、いや別に)」とて(と言って光君は)、異事に言ひ紛らはしたまひつ(他の話に言葉を紛らわせてしまい為さいました)。 \*「さりや」は<やはりそうか>のような、真相に気付いたという語気、を表すと古語辞典にある。「心憂(こころう)」は<辛い気持ち>とあり、端的には<厭だ!>。単純につなげれば<やはりそうか、ああイヤだ!>といったところだが、「さりや、あな心う」は殆んど定型句化しているようで、拙い状況下で発せられる文句だろうから、場面に即して<そうか、困った>とか<そうか、まずいな>とか言い換える事になりそう。マ、言葉を濁すなら<いや別に>かな。

「今は、いかでのどやかに(今は何よりのんびりと)、生ける世の限り、思ふこと残さず(余生を無欲に)、後の世の勤めも心にまかせて(念仏行を心行くまで)、籠もりみなむと思ひはべるを(堂に籠もり座して唱えたいと思っておりますが)、この世の思ひ出にしつべきふしのはべらぬこそ(この世に自分の生きた証しとすべき標がまだ無い事だけが)、さすがに口惜しうはべりぬ\*べけれ(さすがに心残りに存じられますので、)かならず(必ずやその標たる実子入内を果たすべき)、幼き人のはべる(幼子がこの二条院に居る事こそが)、生ひ先いと待ち遠なりや(将来をととても待ち遠しく感じられるところなのです)。 \*「べけれ」は推量の助動詞「べし」の已然形とある。已然形(いぜんけい)とは、順接・逆接の条件文を表す活用形とあり、その条件ゆえの述語が当然に後に続き、説明終了の係助詞「こそ」で文を結ぶ、と文法上に示される。述語を省略した終止形での語用もあるようだが、それは言わずもがなの強調

文で、仮に部分的にでも省略された述語の意味が無くなる事は無いだろう。此処ではそも終止形ではなく、「ど」や「ども」の逆接体でもないので、順接条件で後文に続く。こうした得意でもない文法のノートをしているのは、この文が正に文法の出番たるに相応しい、独特な構文を取っている、と私には思えるからだ。即ち、「べけれ」の条件文を受けて「かならず」は<必ず標と成るべき>を含意できるし、「幼き人のはべる(こそ)」で「生ひ先いと待ち遠なりや」が結びの文だと明示されるのである。

かたじけなくとも(恐れ多くも)、なほ(いっそう主上と睦み為されて)、この\*門広げさせたまひて(我が一族を繁栄させなさって)、はべらずなりなむ後にも(我亡き後も)、数まへさせたまへ(幼子を御引立て下さいませ)」など聞こえたまふ(などと申し上げなさいませ)。 \*「門広ぐ(かどひろぐ)」は<家の繁栄>。注に<源氏一門の繁栄。冷泉帝との間に皇子が生まれることを望む。>とある。が、女御の懐妊と「門」を女陰に掛けたい思いは分かるが、此処での「数まへ」は明石の姫の入内だろう。

御応へは(おんいらへは、女御の御返事は)、いとおほどかなるさまに(とてもゆったりした間で)、からうして一言ばかりかすめたまへるけはひ(控えめにごく短い言葉をか細く仰りなされるように窺えて)、いとなつかしげなるに\*聞きつきて(光君はとても懐かしく御息所が偲ばれて)、しめじめと暮るるまでおはす(しんみりと日が暮れるまでその場に座し為さいます)。 \*「聞き付く」は<心ひかれて聞く。聞き入る。>とあるが、<「聞き付ける」の文語形>とも大辞泉にある。「聞き付ける」は<気付く、聞き知る、聞き慣れる>とある。また、「聞きつきたまひて」という敬語表現になっていないので、これは光君の外形描写ではなく内心代弁として、「御息所」を補語する。

### [第三段 女御に春秋の好みを問う]

「はかばかしき方の望みはさるものにて(栄耀栄華の望みはさて置いて)、年のうち行き交はる時々の花紅葉、空のけしきにつけても(一年の中で移り変わる四季の花や紅葉や空模様にも)、心の行くこともしはべりにしがな(心が動く事があるものです)。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人争ひはべりける(それぞれに人は優劣を言い争っています)、そのころの、げにと心寄るばかり(その季節が確かに最も優れていると納得できるほどの)あらはなる定めこそはべらぎなれ(はっきりとした結論は付いていないようです)。

唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひはべめり(大陸では春の花の鮮やかな色合いに匹敵するものは他に無いと言ってあるようです)。\*大和言の葉には、秋のあはれを取り立てて思へる(和歌では秋の情緒を格別に見ているようです)。いづれも時々につけて見たまふに、目移りて(いづれもその時々を盛りを見ますと目移りして)、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね(とても良くは花の色や鳥の声を見聞き分けて味わう余裕がありません)。 \*「やまとことのは」はそのままと<日本語>であり、また<和歌>を示す語、と古語辞典にある。

狭き垣根のうちなりとも(この狭い屋敷の中であっても)、その折の心見知るばかり(その季節の風情が分かるように)、春の花の木をも植ゑわたし(ある場所には梅や桜の木を植え広げたり)、秋の草をも堀り移して(ある場所には菊や萩を植え替えて)、いたづらなる野辺の虫をも棲ませて(鈴虫や松虫まで住まわせて)、人に御覽ぜさせむと思ひたまふるを(客人に楽しんでもらおうと存じていますが)、いづ方にか御心寄せはべるべからむ(貴方は春と秋とどちらがお好きですか)」

と聞こえたまふに(と光君がお尋ね申しなさっても)、いと聞こえにくきことと思せど(春と秋自体に優劣は無く是は自分の感性と表現力を試されている問い掛けなので、この親密さでこれ以上は光君と打ち解け過ぎたく無い女御は何とも申し上げ難く御思いに成ったが)、むげに絶えて御応へ聞こえたまはざらむもうたてあれば(全く何も御応え申し上げないのも失礼なので)、

「まして(優れた歌人たちでさえ優劣を判じかねているものを、まして私如きが)、いかが思ひ分きはべらむ(どうして決められましょうか)。げに(ただ)、\*いつとなきなかに(特にこの季節とは言えないものの)、あやしと聞きし夕べこそ(感傷的になると良く言われる秋の夕べこそ)、はかなう消えたまひにし(今はもう亡くなった母君を)露のよすがにも(偲ぶ涙に似合う季節かと)、思ひたまへられぬべけれ(存じられも致しますので)」 \*注に<「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」(古今集恋一、五四六、読人しらず)を踏まえる。>とある。「いつとても(この時と言って特に)こひしからずは(恋しくないという季節は)あらねども(無いけれど)あきのゆふべは(秋の夕方は)あやしかりけり(気持ちが波打つものです)」という小学校唱歌のような簡潔さと深さのある歌で、詠み手の技もあるだろうが、日本語自体の味わいが感じられる。というのも、この歌は「あやし」が全てであり、「あや」は波紋や木目の伝播や経緯を意味する。その「あや」のありさまが「あやし」であり、その「あやし」が目につく、という言い方をしただけで、情緒が敏感に成っている感情の起伏の大きさを表現できる「あやし」という語そのものの味わいの深さを感じるからである。だから女御もこの言葉を引いたのだろう。

と、\*しどけなげにのたまひ消つも(濁し気味に尻すぼみな仰り方も)、いとらうたげなるに(とても愛らしいので)、え忍びたまはで(光君は堪らずに)、 \*「しどけなし」は<砕けた様子>だが、非難の意は無く打ち解けた親しみやすい感じを表す、と古語辞典にある。直答ならではの親しさなのかもしれない、尤も、女御は「べけれ」で中止しているので<～で、秋が良いと思います>を省略していて、聞き手に気持ちを預けている。この言い方自体が、いくらか親しみのある甘えた言い方とも思え、それを尻すぼみに小声になる慎みは、如何にも労しい。

「君もさはあはれを交はせ、人知れずわが身にしむる秋の夕風 (和歌 19-08)

「さあおいで、一人じゃ寂しい秋の夕風 (意識 19-08)

\*この歌は、秋を愛でた女御の弁に「きみもさは(あなたもそのように)あはれをかはせ(亡き人と情を交わせるなら)ひとしれず(密かに)わがみにしむる(私も共感して泣けてくる)あきのゆふかぜ(この秋の夕方の風のよそぎです)」と、光君が唱和したようにも見える。しかしまあ、そういう逃げ場を用意しつつも、愛しさに堪らず贈歌した相聞なのだから、「きみもさは(君もそれじゃ、この際思い切って)あはれをかはせ(私と愛の歌を詠み交わそう)ひとしれず(ふたりだけの)わがみにしみる(思い出になる)あきのゆうかぜ(充実した夜へ誘う風向きだから)」という艶めかしさなんでしょうね。

忍びがたき折々もはべりかし(故人が懐かしくてならない時は有るものです、と、貴女への気持ちを抑え切れない時もあるものです、との複意)」

と聞こえたまふに(と御贈歌申しなされば、女御は)、「いづこの御応へかはあらむ。心得ず(どちらの意味で御返歌したものか、下手をして誤解されると困るので、どう応えて良いものか分からない)」と思したる御けしきなり(とお思いのご様子です)。

このついでに(光君はこの際の勢いで)、え籠めたまはで(秘めた恋心を打ち明けて)、恨みきこえたまふことどもあるべし(心ならず養女にして入内させ申した恨み話の数々を女御にしなされたようです)。

今すこし(もう少しで)、ひがこともしたまひつべけれども(狼藉に及ぶ間違いも為さりかねない所でしたが)、いとうたてと(女御が何と無体など)思いたるも(おぼいたるも、御思いになるのも)、ことわりに(分かり切ったことなので)、わが御心も(光君ご自身も)、「若々しう(未熟で)けしからず(筋の通らない事)」と思し返して(と思い返しなさって)、うち嘆きたまへるさまの(溜め息を吐きなさる姿の)、もの深うなまめかしきも(深みのある優美さも)、心づきなうぞ思しなりぬる(女御には心外にさえ思えたのです)。

やをらづつひき入りたまひぬるけしきなれば(そして女御が少しづつ後ずさりして奥へ引き籠もりなさろうとする様子なので)、

「あさましうも、疎ませたまひぬるかな(ずいぶん嫌われたようですね)。まことに心深き人は(本当に愛情ある親なら)、かくこそあらざなれ(こんなことはしない、ということですか)。よし(では)、今よりは(もう致しませんので)、憎ませたまふなよ(お怒りになりませんように)。つらからむ(悲しくなりますから)」

とて、渡りたまひぬ(と言って光君は部屋を出て行きなさいました)。

うちしめりたる御匂ひのとまりたるさへ(その光君の衣服に染み込ませた薫物の匂いが残っていることさえ)、疎ましく思さる(女御は疎ましく御思いになります)。

人びと(女房たちは)、御格子など参りて(格子窓を下げた部屋を片付けながら)、

「この御茵の移り香(このおんしとねのうつりが、殿がお使いになったこのお座布団の残り香は)、言ひ知らぬものかな(言い様も無い良い香りだこと)」

「いかでかく取り集め(如何して殿はこうまでも優れたものを取り集めて)、\*柳の枝に咲かせたる(梅の香と桜の色を優美な柳の枝に咲かせたように全てを備えなされた)御ありさまならむ(お姿なのでしょう)」

「ゆゆしう(恐いくらい)」

と聞こえあへり(などと申し合っていました)。 \*「柳の枝」については、注に<「梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝に咲かせてしがな」(後拾遺集春上、八二、中原致時)を踏まえる。>とある。「中原致時(なかはらのむねとき)」は一条期(986-1011)の明経博士(孔子儒教学者)らしい。

[第四段 源氏、紫の君と語らう]



対に渡りたまひて(光君は西の対にお渡りになって)、とみにも入りたまはず(すぐには帳台にお入りなさらず)、いたう眺めて(とても物憂げに)、端近く臥したまへり(母屋の端の廂の手前で横にお成りになりました)。燈籠遠くかけて(燈籠の灯を離して置いて薄暗くして)、近く人びとさぶらはせたまひて(気晴らしに廂の間に近く女房たちを呼び集めなさって)、物語などせさせたまふ(世間話などをさせなさいませう)。

「かうあながちなること(こんな節度を欠くほどの恋情に)胸ふたがる癖の(胸を痛める男心が)、なほありけるよ(まだ残っていたとは)」

と(と光君は)、わが身ながら思し知らる(わが身ながら思い知らされて御出ででした)。

「これはいと似げなきことなり(これは本当に良くないことだ)。恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど(もっと恐ろしくて罪深いことは多く有ったかもしれないが)、いにしへの好きは(昔の色恋沙汰は)、思ひやりすくなきほどの過ちに(思慮浅い若い頃の過ちなので)、仏神も許したまひけむ(仏や神もお許し下されたのだろう)」と、思しさますも(冷静になられて)、「なほ、この道は(やはり恋愛は)、うしろやすく深き方のまさりけるかな(周囲の事情を良く考えた方が良いと言うことだな)」と、思し知られたまふ(反省なさいませう)。

女御は、秋のあはれを知り顔に応へ聞こえてけるも、「悔しう恥づかし」と、御心ひとつに(ご自分ひとりで誰にも相談できないまま)ものむつかしうて(御心を整理しきれずに)、悩ましげにさへしたまふを(体調を崩しなされるほどでさえお成りでしたが)、いとすくよかにつれなくて(光君は実に真面目ぶって何も無かったように)、常よりも親がりありきたまふ(いつもよりも親らしい素振りを見せていました)。

女君に、

「女御の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の、春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ。時々につけたる(季節に応じて咲く)木草の花によせても(木や草の花についても)、御心とまるばかりの遊びなどしてしがなと(貴方が喜ぶような宴席でも設けたいと、思っても)、公私のいとなみしげき身こそふさはしからね(公私に忙しい身ではそれも適いませんからね。)、いかで思ふことしてしがなと(いっそ前々から考えていたように出家してしまいたいのですが)、ただ、御ためさうざうしくやと思ふこそ(それでは貴方が張り合いがなくなるかと思えて)、心苦しけれ(決心できないのです)」

など語らひきこえたまふ(などとお話し合い申しなさいませう)。

[第五段 源氏、大堰の明石を訪う]

「山里の人も、いかに」など、絶えず思しやれど、所狭さのみ(ところせさのみ、責任ばかりが)まさる御身にて(重くなる御事情なので)、渡りたまふこと、いとかたし(光君が大堰山荘に明石君をお訪ねになることは先ず出来ません)。

「世の中をあぢきなく憂しと思ひ知るけしき(幼子を手放して世の中の巡り合わせを味気なく辛いものだと考えているような明石君だが)、などかさしも思ふべき(如何してそのように考える

のだろう)。心やすく立ち出でて(気軽に東院へ移っての)、おほぞうの住まひはせじと思へる(大部屋住まいなどはしないと君が思っている)」を(のを)、「\*おほけなし(大げさな)」とは思すものから(とは御思いになるものの)、いとほしくて(幼子の可愛さを見れば明石君が労しくて)、例の(例によって)、不断の御念仏にことつけて渡りたまへり(毎月恒例の嵯峨野御堂の念仏行に託けて光君は大堰にお出かけなさいます)。\*「おほけなし」は辞書に<身の程をわきまえない、大それている>とあり、同時に<恐れ多い、もったいない>ともある。「なし」は「為す」の連用修飾で<「おほけ」なさま>を形容詞化している、のだろう。<「おほけ」なさま>は<おおげさ>で、その仰々しさが相応しい権威は畏れ多い、というワケだ。

住み馴るるままに(住み馴れると改装した家も木立に溶け込んで)、いと心すごげなる所のさまに(とても世離れた様子で)、いと深からざらむことにてだに(親子別れという深い事情が無くて)、あはれ添ひぬべし(物寂しい気分になります)。まして(まして明石君は)、見たてまつるにつけても(御会い申し上げる光君のことを)、つらかりける御契りの(分不相応な出会いでの御情けが)、さすがに(それにも関わらず子を儲けた)、浅からぬを思ふに(浅からぬご縁の相手とっていて)、なかなかにて慰めがたきけしきなれば(容易には慰められない様子なので)、\*こしらへかねたまふ(光君はうまく宥めかねて御出ででした)。\*「拵ふ」は<作る、工夫する、準備する>とあるが、事を収めるの意だろうか<宥める、取り成す、取り繕う>ともある。

いと木繁き中より(たいそう木が茂った中から)、\*篝火どもの影の(何艘もの鶺鴒舟がかざす篝火の灯が)、遣水の螢に見えまがふもをかし(庭に配した流水に飛ぶ螢に見えたりするのも風情があります)。\*注に<大堰川の鶺鴒舟の篝火が螢の光に見える。螢の歌語的世界。源氏の抑制された恋情を象形。景情一致の場面。>とある。必脚だし、現代語への言い換えには<鶺鴒舟>の補語も必須だろう。ただ、京都案内のWebサイトには昭和24年(1949)に観光用に復刻した嵐山大堰川の鶺鴒舟の期間が7月1日~9月15日とあって、陰暦9月は現在の10月過ぎだろうから、この章の秋を9月と考えて良いかどうか、やはり真ん中の8月と考えるべきかもしれない。また、多くのサイトに「大堰川 鶺鴒舟にともす篝火の かかる世にあふ 鮎ぞはかなき」(在原業平)がこの鶺鴒舟を詠んだ代表歌として紹介されている。歌の味わいは少し皮肉っぽく聞こえなくもないが、良いキャッチ・コピーと言うか、端的な説明には思える。

「かかる住まひに\*しほじまざらましかば(こうした水辺の暮らしに馴染んでいなかったなら)、めづらかにおぼえまし(私はこの風景をもっと珍しく思ったことでしょう)」とのたまふに(と光君が仰ると)、\*「潮染む」は<海辺の生活に慣れる>。

「漁りせし影忘れぬ篝火は、身の浮舟や慕ひ来にけむ (和歌 19-09)

「懐かしく見る篝火は、この身を哀れむ同情か (意識 19-09)

\*注には<明石の君の歌。「漁り」「篝火」「浮舟」は縁語。「浮き」「憂き」の掛詞。>とある。情景詠みは、「いさりせし(明石の浦で漁をしていた時の)かげわすられぬ(火影を思い出すほど揺れている)かがりびは(この鶺鴒舟の篝火は)みのうきふねや(未熟な者が舟の扱いを)したひきにけむ(習いに来ているところだからでしょうか)」、と読んでみた。海の漁火は波で揺れるだろうし、川を滑る舟の灯は余り揺れない。「巳の浮き舟」が<未熟な舟の漕ぎ手>で良いのかは分からないが、他の解釈が出来ない。複意の方は単純に<明石の頃を思い出させるこの鶺鴒舟のかが

り火は私の辛い立場に同情してくれているかのようです>で良さそうだ。

思ひこそ(一口に同情と言っても色々な思いが)、\*まがへられはべれ(入り乱れております)と聞こゆれば(と明石君が贈歌を申し上げたので)、\*「まがふ」は<紛れる、似ている、見間違う>ともあるが、此処では「られはべる(～という状態になっている)」が「こそ」を受けて「はべれ」と順接中止になって「とぞはべる(～どのように存じます)」が省略されている構文だから、<判然としない→混然としている→入り乱れている>という状態なのだろう。何がかと云うなら「慕ひ来にけむ」「思ひ」が、である。

「浅からぬしたの思ひを知らねばや、なほ篝火の影は騒げる (和歌 19-10)

「ちゃんと分かっていますから、ずっと大事にしますから (意識 19-10)

\*注に<源氏の返歌。「篝火の影となる身のわびしきは流れて下に燃ゆるなりけり」(古今集恋一、五三〇、読人しらず)を踏まえる。「思ひ」に「火」を掛ける。>とある。古今集の歌については、Webサイト「古今和歌集の部屋」に解説があるので助かる。どうやらこの引歌は、船上で篝火を灯した鶺鴒に打ち興じる人々の中では同調出来ずくわびしく>「陰となる身」の詠み手が、うつむいて見た下の川面に映った篝火には同調して「影となる身」になってくわびしく>「掛かる思いー恋心>を<下燃ゆ(表には出さず内心で思い焦がれる)>る、という可なり技巧的な歌のようだ。光君はこの「下燃ゆ」を踏まえて、明石君の「慕ひ来にけむ」の「した」に掛けて応えた。だから、この引歌がほとんど光君の気持ちだろうとは思いますが、「したのおもひ」を<秘めた思い>と一般化しては面白くない。光君と明石君にとっては、「うへのおもひ」は<表向きは紫君が姫君の親代わりだということ>であり、「したのおもひ」は<実は姫君は光君と明石君との間の浅からぬ縁の賜物だということ>である。その事を光君は「知らねばや(済まないと思うからこそ)」「なほかかりひのかげはさわげる(少しも変わる事無くずっと大事に心に掛けている)」と明石君を宥めたのだろう。ただ、「知らねばや」の「ね」は打消しの助動詞「ず」の已然形で、「知らず」を<済まなく思う>という意味に取ったのは後付けだ。が、他の読み方が出来なかったので、敢えて「知る」を<済む←解決する←納得する←理解する>という逆連想でこじつけた。なお、この「や」は強調句と見ている。また、一方で「や」を疑問詞に取る構文では、「ねばや」は<～でないから、～だろう>なので、「知らねばや」は情景詠みでは鶺鴒に遊ぶ宮廷人の修辞条件、ということになる。また、「した」は大堰川のことでもあるので、当歌の表意は<獲られる鮎の深い事情を考えもせずに京処人は鶺鴒に打ち興じているのだろう>と、業平の歌も下敷きになっていることになる。

\*誰れ憂きもの(私こそ辛いのです)」と(と光君は)、おし返し恨みたまへる(逆に明石君を恨みなさいます)。\*注に<歌に添えた詞。「うたかたを思へば悲し世の中を誰憂きものと知らせそめけむ」(古今六帖、三、うたかた)の第四句の言葉。>とある。「うたかた」は古語辞典に<水面に浮かぶ泡>とあり<はかないものたとえ>とある。ただ、「思へば悲し」とあるので<水泡>ではなく、<はかなく死んだ恋人=うたかたびと>のことだろう。字面を追えば、<亡き恋人を思えば悲しくなるが男女の仲を誰が辛いものと教え始めたのだろう>となって、歌意は<本当にその通りだどつくづく思い知ったから、もう恋なんかしたくない>と続く。ところで、「たれうきもの」は「誰れそ～初めけむ」の構文で<一体誰が先に気付いたんだろう>という意味ではある。が、それを下敷きに「たれうきもの」と重ねて言えば、<私こそが先に気付いた>という強調になる、に違いない。

おほかたもの静かに思さるるころなれば(全体に行事や政務が落ち着いているように思われなされた頃なので)、尊きことどもに御心とまりて(この度の嵯峨野行は尊い念仏勤行に打ち込みな

さって)、例よりは日ごろ経たまふにや(いつもよりは日数多く光君が山荘で過ごされたので)、すこし思ひ紛れけむ(明石君も少しは気が紛れたらしい)、とぞ(とのことです)。

(2010年7月9日、読了)